

## 三田盆地を支える有馬層群

北摂三田ニュータウンの位置する高台から望めば、対岸には有馬富士や羽束山、大船山などの山並みが連綿と連なっています。秋も深まった霧の朝、雲海のかなたに三角形の頂上が連なる風景は「有馬富士 ふもとの霧は 海に似て」と花山院のご詠歌にも詠まれ、全国に知られています。三田盆地を特徴付ける秀麗な山々が織り成す景観は、今も昔もまちの魅力であり、宝物です。

これらの山々を形作るのは、三田盆地の大部分の基盤をなす有馬層群とよばれる岩盤です。有馬層群は場所により様々な岩石から構成されますが、いずれも火山の大爆発にともなって形成された火山性の岩石です。形成の時期はおよそ7,000万年前から8,000万年前とされ、その頃の三田は一面、火の海だったとも想像されています(市史第10巻)。

有馬層群の岩石は、種類により様々な特徴があります。有馬富士などの山並みを形作る岩石は、硬くて風化に強い一方で、節理と呼ばれる割れ目に沿ってきれいに割れるという特徴があります。三角形の山並みはこれらの特徴により形作られました。また武庫川の北側(左岸)に多数構築された6世紀から7世紀にかけての古墳の石室の多くも同じ岩石を用いているため、非常になめらかな壁面となっています。

年号が記された県下現存最古の藍本酒滴神社の石鳥居は、波豆川下流の有馬層群から採掘された、波豆石とよばれる石材を用いています。この石は切削の加工がしやすいため、千苺ダムで採石地が水没するまでは、市内や近隣で石材として広く利用されました。さらには全国に名をとどろかせた名産「三田焼」の陶石や青磁の釉薬の原石も、ともに有馬層群の特別な地層から産出されました。その他、弥生時代に現在の三輪小学校付近に工房があったとされる石包丁は、有馬層群のうち塩田石とよばれる石材を磨いて製作されて、太古の三田米の収穫に用いられました(市史第8巻)。

私たちの暮らすまちを支える岩盤もまた、里のめぐみであり、地域の文化やまちの魅力を支えてきた文字通りの基盤だったのです。